

Working Paper Series No.29



〈ウクライナに於いてドイツ軍の捕虜となりたる日本人〉
——ケーニヒスベルグの織田寅之助と高島與五蔵——

神戸学院大学経済学部
岡部芳彦

2021 年 8 月

THE ECONOMIC SOCIETY OF KOBE GAKUIN UNIVERSITY

〈ウクライナに於いてドイツ軍の捕虜となりたる日本人〉 ——ケーニヒスベルグの織田寅之助と高島與五蔵——

1 はじめに——「高島職員」の謎——

1945 年 1 月、差し迫るソ連軍を前にドイツのケーニヒスベルク（現ロシア連邦・カリニングラード）総領事代理であった織田寅之助副領事は職員 4 名とともに領事館に籠城することを決めた。その顛末については、1945 年 5 月 1 日の朝日新聞に次の記事が掲載されている。

廢墟に日の丸翻し

弾雨下、死の籠城

ケーニヒスベルグ駐在織田副領事に聴く

【満洲里にて楠特派員二十九日発】昭和十五年十一月以来外交官としてドイツケーニヒスベルグの帝国総領事館に在り東部戦線をはじめ欧州戦の実情を具に見聞し、特に去る四月ケーニヒスベルグ陥落の前後において鮮烈なる砲爆撃下に身を挺し、独ソの攻防戦を体験しつつ決死の覚悟で日本外交官として事務を処理し、全く奇跡的に難を免れ赤軍ケーニヒスベルグ入城とともにモスクワに送られ、去る二十日モスクワ発帰国の途についたケーニヒスベルグ駐在日本総領事館副領事織田寅之助氏は二十九日午後無事満洲里に到着した。同氏はケーニヒスベルグ籠城中の有様を中心に左のごとく語った¹。

籠城の経緯については、戦時中であるもののドイツの敗戦が確定的であったためか、客観的に、また詳細に書かれている。記事によれば、織田は「高島職員と独人職員 3 名」と総領事館で籠城することに決めた。しかし、この「高島職員」は名字のみで名前の記載はない。またその後、織田とともに、日本に帰国したのかは書かれていない。この高島こそ、数奇な運命を生きてウクライナの地にたどり着いた日本人であった²。

織田寅之助は、1902 年生まれ、神戸郵便局通信書記補、通信書記を経て、1922 年に外務省に通信書記として入省した。同年に外務書記生試験並外務省留学生試験に合格しポーランドのワルシャワに留学、1925 年に外務書記生としてポーランド在勤、1926 年に外務局大臣官房電信課を経て、1927 年より再びポーランド在勤となった。1932 年 1 月にはスイスのローザンヌ賠償会議における帝国代表委員付、同年 11 月ペルシア（イラン）在勤、1934 年ポーランド在勤、1938 年スイス在勤、1939 年ペルー在勤、1940 年ボリビアとエクアドル兼勤の後に、1941 年 2 月、ケーニヒスベルグ総領事館に杉原千畝の後任として赴任し総領事館事務代理を務めた。戦後は終戦連絡官を務めて 1946 年に外務省を退官した。以後は絵画の制作に打ち込むとともにポーランドに留学経験のある守屋長とともに『野の国ポーランド—その歴史と文化』を刊行している³。

本章では、織田の刊行された手記や現存する史料と、親族より提供された日記や写真から

可能な限り、高島の人生を辿ってみたい（図1）。

図1 織田寅之助（前）と高島與五蔵（後）



【出典】伏木宏奈氏蔵。在ケーニヒスベルグ日本総領事館で撮影。

2 「ウクライナに於いて独逸軍ノ捕虜となりたる日本人に関する件」

(1) ケーニヒスベルグの織田と高島

在ケーニヒスベルグ日本総領事館は、1941年3月6日に開館した⁴。その目的は 独ソ関係、ソ連邦、ポーランドにくわえて「〈ウクライナ〉情報蒐集に便なる」ためであった⁵。

1942年7月7日に在ケーニヒスベルグ日本総領事館事務代理であった織田寅之助から大島浩駐独大使の大島浩宛に、「ウクライナに於いて独逸軍の捕虜となりたる日本人に関する件」という機密電が打たれた⁶。それによれば同年6月25日、ドイツ軍の下士官がケーニヒスベルグ総領事館に一人の日本人を引き渡した（図2）。

図2 織田とドイツ軍下士官



【出典】伏木宏奈氏蔵。撮影日不明。高島を引き渡した下士官かは不明。

前年の1941年9月ドイツ軍はウクライナ方面に進撃した際、チェルニーヒウ市の刑務所に投獄されていた囚人を取調べたところ「日本人なること及非戦闘員」であることが判明したため、ドイツ側から同総領事館へ身柄を引き渡したい旨が書かれた次の書簡を持参していた（図3左）。

野戦郵便支所番号 05 575 O.U,

1942年6月23日 在ケーニヒスベルグ日本領事館宛

日本市民タカシマ・ヨウグズは、05 575 部隊のドラビンスキー下士官が手交する釈放証明

書を使用する。当人は以前、ドイツ軍の捕虜として拘禁されていた。

個人情報はおのとおりの：

姓：タカシマ

名：ヨウグズ

生年月日：1919 年 12 月 17 日、横浜

宗教：仏教

父の名：ナチャラ

母姓：イセザワ

国籍：日本人

職業：教師

拘束（日付と場所）：1941 年 9 月 19 日チェルニゴウ

身長：1.72 m

/オットー/

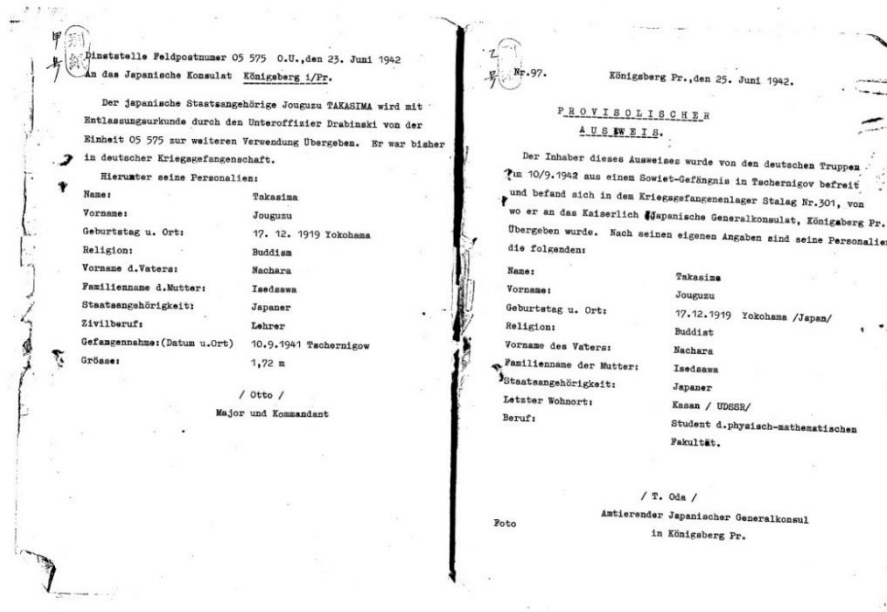
少佐・部隊長

織田がその本人を尋問しようとしたところ、日本語はうまく話せなかったが、次のような経歴が分かった。姓名は「高島ヨグズ」または「ヨゴゾー」で、本人の記憶も曖昧であった。父は「高島ナハラ（またはナハロー）、母は「イセザハ・ミハト」で 1919 年 12 月 17 日横浜市生まれである。1921 年、シベリア出兵時に、父親が家族とともにイルクーツクへ行き「進藤」が実施していたバイカル湖での漁業に従事し住み着いた。しかし 1935 年、父親が逮捕され、1937 年には母親も逮捕され消息を絶った。高島は、「イルクーツク国民小学校」を卒業して、15 歳まで両親と暮らした。その後、同地の国立大学に入学したが、父親の逮捕後、単身でカザンに移り、同地の国立大学理学部に入学したが、1940 年に逮捕された。

高島はカザンで反共産主義の団体「東亜民族援助協会」に入ったが日独伊防共協定締結時に同団体が反共宣伝をしたため当局の監視を受け、多数が逮捕された。高島も捕まり、カザン革命裁判によって 8 年の禁固刑に処せられ収監された。その後、チェルニーヒウ刑務所に移され服役中の 1941 年 9 月 10 日、ドイツ軍が同地を占領した際に、捕虜としてコウエル（コーヴェリ、現ウクライナ・ヴォルィーニ州）に送られ、日本人と判明したためケーニヒスベルグに移送されたのであった。

織田は「幼少より共産主義的教育を受けたる者」であるので慎重に取扱いながらも、ドイツ軍がチェルニーヒウ刑務所内のソ連側の書類により日本人であることを確認したこと、また高島が「資性温順」で挙動に不審な点がなかったので、総領事館で引き取り、1942 年 6 月 25 日付でドイツ語の証明書を発行することにした（図 3 右）。個人情報についてはドイツ軍からの書簡とほぼ同内容であるが、最終居住地としてカザンが加筆され、また職業欄が「教師」から「学生（物理・数学専攻）」へと修正されている。その後、織田は現地の労働局とも相談し、高島はシーハウ（Schichau）船舶工場で就業することとなった。

図3 ドイツ軍の書簡（左）と日本総領事館の証明書（右）



【出典】JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02032392900、5. ウクライナに於てドイツ軍捕虜になった日本人関係（A-7-0-0-8_6_001）（外務省外交史料館）第9画像。

図4 在ケーニヒスベルグ日本総領事館職員の集合写真



【出典】伏木宏奈氏蔵。1944年頃。織田寅之助（前列右から2番目）と高島（後列最右）。もう一人写る日本人（後列左から3番目）は堀岡智明。

高島はどのような人物で、またケーニヒスベルグでどのような暮らしをしていたのだろうか（図 4）。表 1 は織田が残した日記から高島に関する記述をまとめたものである。織田の高島に対する最初の印象は「高島は全くのロシア育ちで面白し。田舎者丸出しなれど字も頭も仲々よし、一寸外見蒙古人」であった。ドイツ軍から総領事館に引き渡されて 3 日後の 6 月 28 日には、織田は高島を連れてケーニヒスベルグの海岸地帯をドライブし、30 日には買物に出かけ、その日に高島はシーハウ工場の合宿所へと移っている。7 月 1 日に一度、同工場から採用を断られたが、結局雇われることとなった。その後しばらくの間、一か月に一度程度、高島は総領事館に顔を出していたようである。12 月 24 日には、「アルセニエフ」をはじめとする総領事館のドイツ人傭人らとプレゼント交換をした⁷。27 日には再訪して他の客と夕食を共にし、その後トランプに興じた。31 日大晦日にも高島は来て、織田と新年を迎えている。

図 5 庭でくつろぐ織田と高島



【出典】伏木宏奈氏蔵。

年が明け 1943 年 1 月 4 日は織田にとって仕事始めであったが、早速高島が来た。2 月 6 日には、夕食を共にし、その後散歩している。2 月 27 日には、スイス・イタリア出張から帰ったばかりの織田が高島に時計を渡すと「大喜び」した。3 月 7 日には、高島がウクライナ人の友人を伴って織田の元を訪れている。2 日後の 3 月 9 日には「高島旅券の件で来る」と記されており、高島に対する日本の旅券発給について話し合われたと思われる。4 月 3 日、

4日と立て続けに訪れたが、4日は高島を最初に連れてきた「ドイツ軍将校」が一緒であり、織田は「ウクライナの話、面白し」と書いている。4月26日、再訪した高島は「兵隊になりたい」と言った。6月5日も来訪があり、23日には高島を含む6人でドイツ騎士団が築城したマリエンブルク城を見学したのち⁸、夜はルーレットに興じた。スペイン・バルセロナの出張から戻った織田は、11月21日に高島や他の日本人を招いて夕食を共にしている。

1944年の前半には、高島と織田の関係に大きな変化が訪れた。同年6月6日、高島は約2年間勤めたシーハウ工場を退職して総領事館に勤めることとなった。しかし、総領事館の雇人との折合が悪く、それについて織田は、高島に意見したが聞く耳を持たないので、6月30日、織田は「遂に我慢し切れず解雇」した。その時の感想を「二年余の努力も効無く結局日本人になれない事が判った」と記している。しかし、7月12日には高島が謝罪に来たので「許して働かす事にした。」

その後、8月22日には庭で碁を打つなど平穏な日々を過ごしていた織田と高島であるが（図5）、状況が急変する。8月26日、午後4時半からテニスにでかけ優勝し、夕食に天ぷらを食して9時からクラブで乾杯をした織田であったが、夜中の12時半に空襲警報がなり、翌27日午前1時半頃から英空軍による空襲が始まった。ケーニヒスベルグの中心地帯は大火災となった。8月29日から30日かけても再度空襲があり、午前1時40分頃から防空壕に入った。織田は「昨日の空襲は意外に大きくケーニヒの中心は殆ど全滅」と記している。高島らと総領事館に留まった織田は、9月2日に庭に防空壕を完成させている。その後は、庭で碁を打ったり、総領事館で映画鑑賞をするなど落ち着いた日々を過ごし、12月24日にドイツ人雇人ら11名でクリスマスイヴを過ごし（図6、7）⁹、31日には新年を祝っている。

織田は2年あまりの間、高島の生活を公私にわたり支える一方、本国に宛て、その身分照会も行っている。1944年6月14日に神奈川県知事宛に身元調査を依頼した。1944年8月6日に、神奈川県知事名で外務次官に以下のとおり回答がなされた。

独逸人の捕虜となりたる日本人身元調に関する件回報

本年6月24日付條普通第878号を以て依頼に係る表記の件に関し本県海外渡航許可関係記録その他に付調査するも該当者認めらるるもの無之候條此段及回報候也¹⁰

理由としては「関東大震災により横浜市戸籍原簿消失」し、本件の調査は不可能とのことであった。結果として、本人だけではなく父母についても、日本側には戸籍等の記録がなかった。

1944年4月1日に織田から重光葵外務大臣宛に打たれた機密電によれば、ドイツ軍からの引渡し後、2年あまり高島の行動を注視した結果「性質実直にして日本人としての体面を顧慮しつつ行動し居るやに見受けられ勤務工場に於いて厚遇」されていた。また、戦後は帰国し定職を得る希望を持つようになっており、身元の取調べが終わり次第、正規旅券を発給する意向が報告されている¹¹。

図6 在ケーニヒスベルグ日本総領事館でのクリスマスパーティー



【出典】伏木宏奈氏蔵。1944年12月24日。

図7 クリスマスツリー前の織田と高島



【出典】伏木宏奈氏蔵。1944年12月24日。

表 1 『織田寅之助日記』における高島についての記述

日時	織田の記述
1942 年 6 月 25 日	午前露西亜にて捕虜とせる日本人来る。
1942 年 6 月 26 日	高島は全くのロシア育ちで面白し。田舎者丸出しなれど字も頭も仲々よし。一寸外見蒙古人。
1942 年 6 月 27 日	高島総領事館の三階で寝ているが雇人共笑ったり間話したり。
1942 年 6 月 30 日	高島買物出来シーハウ工場の合宿へ移る。
1942 年 7 月 1 日	高島シーハウを断られ悲観したが又雇われる。
1942 年 8 月 2 日	高島来る。
1942 年 8 月 8 日	高島と Böhner 氏へ呼ばれる。
1942 年 9 月 13 日	午前中高島のバラック訪問。
1942 年 10 月 24 日	高島来る。夕食。
1942 年 11 月 14 日	高島来り夕食。
1942 年 11 月 22 日	高島来る。夕食。
1942 年 12 月 13 日	高島来る。
1942 年 12 月 24 日	アルセニエフ、フランツ、雇人一同ヘルテイ、ヴァンダ、高島贈り物交換。
1942 年 12 月 27 日	高島来る。
1943 年 1 月 4 日	仕事始め。高島来る。
1943 年 2 月 6 日	高島来る。夕食後に散歩。
1943 年 2 月 27 日	高島来る。時計呉れる。大喜び。
1943 年 3 月 6 日	高島来る。夕食後に散歩。
1943 年 3 月 7 日	高島ウクライナ人の友人と来る。
1943 年 3 月 9 日	高島旅券の件で来る。
1943 年 3 月 13 日	午後高島来る。
1943 年 3 月 14 日	高島来る。
1943 年 3 月 21 日	午後高島来る。散歩。
1943 年 4 月 3 日	午後高島来る。
1943 年 4 月 4 日	高島来る。高島を最初に連れてきた独乙将校来訪。ウクライナの話面白し。
1943 年 4 月 26 日	高島来り兵隊になりたいと云う。
1943 年 6 月 5 日	午後高島来る。
1943 年 6 月 23 日	朝活動して 10 時 26 分でマリエンブルグ。山口、エリ、フリーデル、ヘルテイ、高島と六人。12 時 40 着。河辺で（著者注：判読できず）、城を見学して 5 時の汽車で帰る。夜ルーレットをして

	遊ぶ。
1943 年 7 月 11 日	Zoo 駅着。フリーデル、高島。
1943 年 11 月 21 日	午後...高島来る。
1944 年 1 月 15 日	吉井、篠原、高島話して夜遅くなる。
1944 年 1 月 18 日	吉井、高島、ガンダ碁。
1944 年 1 月 29 日	午後高島に碁を教える。
1944 年 1 月 30 日	米の虫を掃除していると高島が来て一緒に散歩、公園で写真を撮る。夕食を一緒にして話す。
1944 年 2 月 13 日	午後高島、吉井君と碁。夕食篠原君も来てガンダも来て夜遅くまで遊ぶ。
1944 年 2 月 19 日	夕食篠原、高島、うどん作って大食い。
1944 年 3 月 6 日	午後高島来る碁。一緒に散歩。高島の宝見る。
1944 年 3 月 18 日	篠原、堀岡、守屋、吉井、高島、夕食天ぷら。夜遅く迄 連碁をやる。
1944 年 3 月 23 日	午後も庭を一通掃除、高島も来る。
1944 年 4 月 1 日	高島来る（著者注：判読できず）碁。
1944 年 4 月 9 日	夜遅く迄遊ぶ。中川、山口、堀岡、篠原、吉井、高島、（著者注：人名、判読できず）、守屋、家の雇人三人。
1944 年 4 月 20 日	午後高島来る。
1944 年 4 月 22 日	午後庭の手入れして夕食。堀君、吉井君とする（高島も）。
1944 年 5 月 6 日	篠原、吉井、堀岡、高島夜天ぷら。
1944 年 5 月 27 日	誕生日／夜雇人一同も一緒に誕生日の遊び。夜遅く迄遊ぶ。篠原、吉井、堀岡、山田、フリーデル、高島、ヘルテイ、ミーア。
1944 年 6 月 6 日	夜高島来る。シーハウ退職してこちらで勤める。
1944 年 6 月 19 日	夕食篠原君来て一緒に。皆で一寸活動見て十時迄碁（篠原、堀岡、フリーデル、ヘルテイ、高島）。
1944 年 6 月 28 日	高島どうも雇人との折合よくないらしく困ったものなり。
1944 年 6 月 30 日	高島意見したが聴かぬので遂に我慢し切れず解雇する事とした。二年余の努力も効無く結局日本人になれない事が判った。
1944 年 7 月 2 日	高島結局労働局へゆく事になる。
1944 年 7 月 4 日	高島遂に飛び出す。
1944 年 7 月 12 日	午後高島来て詫る。許して働かす事にした。
1944 年 7 月 15 日	菊地氏来り吉井、高島と（著者注：判読できず。レストラン名と思われる）で夕食。
1944 年 8 月 19 日	午後庭で高島と碁を打つ。

1944 年 8 月 22 日	午後天気よく高島と庭で碁。
1944 年 9 月 1 日	夜高島、堀岡君と三人で頑張る。
1944 年 9 月 2 日	高島とウクライナの老人と三人で夕方から防空壕にトランクを入れたり用意を（著者注：判読できず）怠りなし。
1944 年 9 月 4 日	高島鶏小屋作る。
1944 年 9 月 8 日	高島と碁。
1944 年 9 月 21 日	高島と碁一局。
1944 年 9 月 24 日	高島、ミーア、ヘルテイ。
1944 年 9 月 30 日	午後高島、フリーデルと小島の親父の所へ行く。
1944 年 11 月 3 日	夜バルチ、高島と活動（著者注：映画鑑賞）。
1944 年 12 月 22 日	フリーデル、高島、バルチ出迎え（中略。著者注：織田は 11 月 30 日に堀岡とベルリンへ行っていた）。 高島が女中共とよくけんぐわしたらしい。
1944 年 12 月 24 日	クリスマスイヴ（中略）待望のクリスマス。食堂の支度をする。プレゼントと飾り用意をする。七時より会食。ケルナー夫人、堀岡、バルチ夫妻、フリーデル、ヘルテイ、ミーア、ゲルダ、高島、ヤコヴと十一人。
1944 年 12 月 25 日	夕食後フリーデル、ヘルテイ、高島と 21 をやる。
1944 年 12 月 26 日	皆で又 21 をやる。後でバルチ、高島と様々活動をする。
1944 年 12 月 28 日	夕食後ロテリーの支度し Silvester の勲章を作る（高島と）。
1944 年 12 月 31 日	多幸な新年を祝す。高島、バルチ夫妻、フリーデル、ヘルテイ（二人）、ミーア、ゲルダ、ガンダ。

【出典】『織田寅之助日記』（伏木宏奈氏蔵）1942 年～44 年。高島の名前が確認できる部分のみ抜粋。

（2）ケーニヒスベルグ籠城

織田の日記は 1945 年分が現存していないため、その後の織田と高島の日常は分からない。一方、織田は、戦後すぐに『大衆読売』に「ナチ独逸崩壊の頃を想う」と題して 2 号にわたり寄稿し、1956 年には『文藝春秋』の企画「実話募集：私にもこんなことがあった！」に「ケーニヒスベルグ籠城記」で応募し、募集総数 1279 編中 5 編に入選した。本節では織田の手記を中心に、1945 年のケーニヒスベルグ籠城の経緯と高島の足跡を追ってみたい。

1944 年 7 月 7 日、ケーニヒスベルグ大学創設 400 年祭りのため、パークホテルのロビーにいた織田は、式典に出席していたベルンハルト・ルスト科学・教育・文化大臣や同地が故郷のヴァルター・フンク経済大臣とサイパン陥落などについて話していた。東プロイセン州総督で前年 10 月までウクライナ国家弁務官を兼務していたエーリッヒ・コッホは、

自身が設立した私兵から発展した国民突撃隊に対戦車砲を持たせることを話したがその様子はどこか寂し気であった¹²。織田にとってナチス政権高官と会ったのはこの日が最後となった。

同年秋、総領事代理として同館の責任者であった織田は本省の指示で、総領事館を閉鎖し、一旦ベルリンへ引き揚げていた。「総領事館に残してきた留守番の T 君」、つまり高島からケーニヒスベルグの市内は大混乱で「一体どうしたら良いのか、何とか後始末をつけに来てくれないか」と毎日のように電話がかかってくる。駐ベルリン日本大使館は行くのを見合わせたほうがよいと忠告したが、ソ連軍の進捗からまだ往復するぐらいの時間はあり、また高島やドイツ人職員を置いたままにするのは心苦しいと考えた末、まだ運航していたルフトハンザ機で 1945 年 1 月 24 日テンペルホフ空港を飛び立った。

飛行中、近くで空中戦が始まり、乗機は退避するとともに海面すれすれに飛び、2 時間後にはケーニヒスベルグ空港に降り立った。市内は予想以上に混乱状態で、夜に総領事館にたどり着いた。翌朝、状況は急変し、ソ連軍は市の 30 キロ地点に達しており、空港は砲撃目標となり空路は断たれた。驚いた織田は、ヘルムート・ウィル市長に面会したところ、普段の平服ではなくナチス党服姿ながら意気消沈しており、ポーランド回廊が占領され鉄道は不通、海路も前日にダンチヒ沖で避難船が撃沈され安全ではないと説明を受け、中立国の外交官なのでここに留まったほうがいいのではないかと忠告を受けた。決心がつかず、その後、港を見に行ったら織田だが、ソ連の偵察機が旋回するなか、2000 トン級の「ボロ貨物船」に避難民が鈴なりに乗り込んでいる様子を見て、ケーニヒスベルグに踏み留まることを決心した¹³。

総領事館へ戻った織田は、ケーニヒスベルグに留まる決意をスタッフに伝えた。避難したいと言った運転手夫婦と料理婦を織田自身が港へ連れて行き船に乗せた後、高島とドイツ人スタッフに砲火を避けるために地下室の整理をさせた。1 月 27 日、ケーニヒスベルグ第一軍管区司令官オットー・ラッシュによって要塞都市宣言が出されると、ソ連軍は「ハタと攻撃の手を緩めて、市を遠巻きに包囲して陣地を敷いて動かなくなった。」¹⁴

織田が司令部を訪れたところ、「要塞生活に平服は不都合だろうから」とドイツ空軍将校の制服を渡された（図 8）。砲撃は止むことはなく、総領事館にも何発か着弾し、2 階と 3 階は穴だらけとなった。それから一か月ほどは比較的平穏に過ぎて、織田は庭の雪から砲弾の破片や降伏勧告のビラを拾う余裕があった。3 月半ばを過ぎ、「ソ連軍機の来襲も、砲弾の数も日毎に殖えて、何かただならぬ気配が感じられた。」¹⁵

図 8 ドイツ空軍将校の制服で防空壕の前に座る織田



【出典】伏木宏奈氏蔵。

4月1日に復活祭を迎え、籠城中のドイツ軍兵士とささやかな宴をもったが、その後の1週間のソ連軍の攻撃は凄まじく「殊に最後の三日間と云うものは文字通り砲弾の雨、爆弾の嵐」であった。4月7日には総領事館のある地区も攻撃目標となり、織田は「いよいよ明日は自分たちの番だ」と覚悟した¹⁶。翌日1階の窓から外をみるとソ連兵の姿があった。織田はかねてから自動車用の日の丸小旗に墨で日本総領事館と書いたものを用意しており、門標に打ち付けようと外に出たところ拳銃を持ったソ連軍の伍長と遭遇した。織田は「日本とソ連は戦争をしていない」と話しかけると伍長も銃を下げ、日本の外交官であることを説明した。同日夜にはソ連軍司令部から大尉2名と少尉が総領事館に来たので、保護と在モスクワ日本大使館への連絡を依頼した¹⁷。

翌日、数名のソ連兵が司令部からの命令で庭の掃除にやってきた。続いて5名の兵士が豚肉、砂糖、パン、バター、米などの食料を持ってきた。次に大尉と数名の下士官が来て、ニュース映画の中に入りたいから撮らせてくれと依頼してきた（図9）。その時の模様を織田は、戦時中の『朝日新聞』と戦後の手記で以下のように振り返っている。

さてエピソードみたいなものですがケーニヒスベルグで赤軍が入ってからある日ニュースカメラが来て映画をとるというので承知すると、兵隊を連れて来て突撃の真似をさせ、私が館内から門に出ると番兵が捧げ銃し面喰った。これは全く芝居をやったので、私は悪い宣

伝に使わぬように頼んで来た¹⁸。

勿論私に異論は無かった。大尉は私に、一たん地下室に入って、合図をしたら出てきてくれ、と云う。私は地下室で待っていたが、なかなか出て来いと云わない。そっと一階へ上って覗いてみると、一人の少尉が十人程度の兵隊と何かゴソゴソと演出している。どうやら日本総領事館を発見した、という筋書きらしい。暫くすると、出て来いと云う合図があったので、T君を従えて地下室から出て行った。するとそこには一列の兵隊が整列していて、私が出ていくと少尉は挙手、兵隊は捧げ銃をやる。この演出には私も面喰った¹⁹。

図9 日本総領事館地下室から出た後の高島



【出典】伏木宏奈氏蔵。右後方にソ連兵。

いわゆる、やらせ映像であるが、織田はこの映画の題を『ワイクセルからオーデル』と聞いた²⁰。このニュース映画の様子は、現在、カリーニングラードの地元紙や郷土史のウェブ記事などで紹介されている²¹。その写真を見る限り、まずブーツを履いた高島が地下室から出て、その後、織田が続きソ連軍将校から敬礼を受けている様子が分かる。

3 むすび——その後の織田と高島——

ケーニヒスベルグ陥落後の織田と高島はどうなったのであろうか。陥落後ちょうど1週間目の4月14日の昼過ぎに、3、4名のゲーペーウらしきソ連軍将校がやってきた²²。すぐにモスクワに連れていくと言われ、手回り品だけ持って自動車に乗せられ、郊外の飛行場に到着して2時間ほど待たされた後に、「米軍のマーク」の付いた軍用機で飛び立った。途中、吹雪のためモレンスクに不時着し、ソ連軍将校と一晚を過ごした²³。話が弾む一方、織田は将校との話の結論として「ソ連邦が独逸降伏の後はその鋒先を日本に向ける事をハッキリと読み取った」のであった²⁴。織田は帰国後に東郷外相に、ケーニヒスベルグ籠城の顛末に加えて、ソ連の対日参戦の可能性について記した報告書を提出したが、日本は当時ソ連に和平交渉の仲介を要請しており、その情報が生かされることはなかった²⁵。

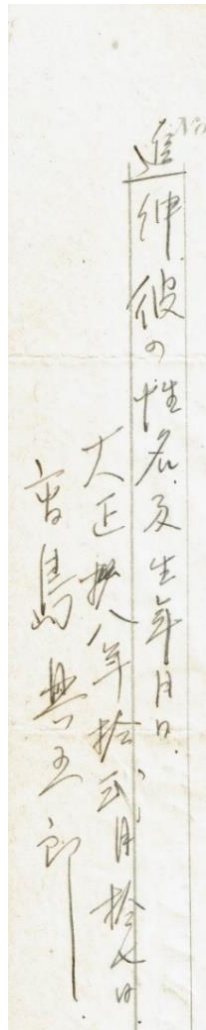
織田はモスクワ到着後、日本大使館に引き渡され、5日間滞在し、対独戦勝に湧くモスクワ市内を見て回った。おそらく列車で、満洲国境に達したのが「天長節の朝」つまり4月29日であった。滞在先のハルビンでヒトラーの死を聞き、その後、新京を經由して博多に到着し帰国を果たした²⁶。

高島の籠城後の消息については、織田の手記、新聞記事にも書かれていないが、実は高島は織田とともに無事に満洲に到着していた。7月28日に馬瀬金太郎ベルリン総領事が東郷外相に提出した「在ドイツ邦人引揚に関する件」と題された報告の中の「独逸よりの帰朝者名簿」には、織田の名前とともに「高島ヨグツ」の記載がある²⁷。織田は6月までに帰国したが、高島は「満洲国残留者」を示す○印が付けられている。

その後、高島がどのような経路、経緯で帰国したかは分からない。織田が親族に語ったところによれば、高島は日本に引揚後、東京へ向かった。10年あまり後、織田は意外なことから高島の消息を知ることになる。1956年、『文藝春秋』2月号に織田の「ケーニヒスベルグ籠城記」が掲載された。織田は、その中高島のことを「T君」としている。すると同年7月27日頃、織田の元へ記事を読んだ東京都大田区に住む角田恒道という人物から手紙が来た。角田の手紙には、T君が「高島與五郎」のことではないかと書かれていた。手紙の最後には「彼の姓名及び生年月日：大正8年12月17日」と記載されており、1942年の織田の機密電とも一致することから同一人物とみて間違いない（図10）。

角田は、高島について「あまり話はしませんが、実は語学が達者」と書いており、あまり日本語が話せなかった様子も窺える。6年前、角田の会社がタイプライターと電気計算機を購入した際にその担当となったが、現在では「乞食同様の生活」をしているのでなんとかしてほしいとのことであった。また、「彼の考えは非常に大きくて金もないのに、家もなく、毎日の食事さえ事欠く状態ながら、尚勝己の意志をつら抜こうとしていることは立派に見えます」と評しており、高島の性格を垣間見ることができる。

図 10 角田恒道の手紙



【出典】伏木宏奈氏蔵。

その後、織田は角田と連絡を取り、高島に会うためにすぐに上京した。しかし、織田が到着した時には、高島はすでにいなかった。路上生活の最中、行倒れて病院に運ばれて死亡した後であった。身寄りもないため、織田は病院で骨だけになった高島と対面したという²⁸。

織田の手記や記録によって、数奇な運命を歩んだ「ウクライナに於いて独逸軍ノ捕虜となりたる日本人」高島の人生を概ね辿ることができた。一方、ソ連の政治犯としてウクライナに投獄されていた者が、なぜかモスクワ経由で帰国できたかなど謎も残されたままである²⁹。これまで日本から自らの意思でソ連に渡り、粛清されたコミンテルンや共産党関係者を中心とした日本人の研究は進んでいるが、高島一家のように日本軍のシベリア撤兵後もソ連に残留した普通の日本人の消息はほとんど知られていない³⁰。本章からは、スターリン体制下の粛清で、彼らのように消息を絶った名もなき日本人がいたことが分かった。彼らについての今後の研究の進展を期待したい。

※本章の作成にあたっては織田寅之助の孫である伏木宏奈氏より史料をご提供いただいた。また『織田寅之助日記』の整理もしていただいた。くわえて様々なご指摘ならびにご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。また次の論考も参考とした。伏木宏奈「激戦下のケーニヒスベルク」『せんぼ』杉原千畝研究会、2017年。

¹ 「廃墟に日の丸翻し／弾雨下、死の籠城／ケーニヒスベルグ駐在織田副領事に聴く」『朝日新聞』1945年5月1日朝刊2面。

² 織田と高島については以下でも一部触れられている。泉孝英『日本・欧米間、戦時下の旅：第二次世界大戦下、日本人往来の記録』淡交社、2005年、237～238頁。

³ 守屋長、織田寅之助『野の国ポーランドーその歴史と文化』帝国書院、1949年。織田の経歴は同書を参照した。なお、同書によれば守屋長の略歴は1906年東京生まれ、北大予科を経て京都大学文学科言語学専攻卒業。1937年ポーランド交換学生として渡欧、ドイツ滞在を経て1945年帰国、1949年時点で神戸経済大学予科ロシア語教授。

⁴ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B13091880600、外務省報 第二十六卷(外・報26)(外務省外交史料館)第1画像。

⁵ 田嶋信雄「ナチ時代のベルリン駐在日本大使館：人と政策」『成城法学』48号、1995年、405頁。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B14090242800、4. 在「ケーニヒスベルグ」領事館（M-1-3-0-1_1_23）（外務省外交史料館）第2画像。

⁶ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02032392900、5. ウクライナに於てドイツ軍捕虜になった日本人関係（A-7-0-0-8_6_001）（外務省外交史料館）第1～11画像。

⁷ 「アルセニエフ」はユーリー（ゲオルギー）・セルゲイヴィチ・アルセニエフと思われる。ユーリーは元白軍将校で、杉原千畝の下でケーニヒスベルグの日本総領事館で秘書として働いた。兄ニコライ・セルゲイヴィチ・アルセニエフは白軍の元協力者でケーニヒスベルグ大学の教授を務めた著名な哲学者であった。Бирюков Г. Семья Арсеньевых и японский святой, Берега 2019/ №6 (URL: <http://www.xn--80alhdjhdcxhy5hl.xn--p1ai/content/sem-ya-arsenevych-i-yaponskiy-svyatoy> 最終閲覧日：2021年7月30日)。

⁸ 現ポーランドの世界遺産マルボルク城。

⁹ 図6に写っている人数は織田を含んで11名、そのうち日本人3名であり、男女比も一緒であることから、写っている人物が「ケルナー夫人、堀岡、バルチ夫妻、フリーデル、ヘルテイ、ミーア、ゲルダ、高島、ヤコヴ」と織田である可能性が高い。織田のメモには、堀岡はベルリン日本研究所の関係者と書かれており、また織田の手記には「高野山大学の堀岡智明」と書かれている。なお、「吉井」は「京大生物学の吉井良三」、「篠原」は「カント哲学研究の篠原正瑛」であった。織田寅之助「ケーニヒスベルグの思い出」郵政弘済会『ゆうびん』1955年10月号（第6巻10号、通巻62号）、3頁。

¹⁰ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02032392900、第8画像。

¹¹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02032392900、第2画像。

¹² 織田寅之助「特別寄稿／ナチ独逸崩壊の頃を想う」『大衆読売』第2号、1946年、11頁。

¹³ 織田寅之助「ケーニヒスベルグ籠城記」『文藝春秋』2月号、1956年、235～236頁。

¹⁴ 織田「ケーニヒスベルグ籠城記」236頁。

¹⁵ 織田「ケーニヒスベルグ籠城記」239頁。

¹⁶ 織田「ケーニヒスベルグ籠城記」240頁。

¹⁷ 織田「ケーニヒスベルグ籠城記」243頁。

¹⁸ 『朝日新聞』1945年5月1日朝刊。

¹⁹ 織田「ケーニヒスベルグ籠城記」244頁。

²⁰ Василий Беляев 監督作『ヴィスワからオーデル（От Вислы до Одера）』（1945年）と思われる。

-
- ²¹ Якшина, Д. ТРИНАДЦАТЫЙ КОНСУЛ КЁНИГСБЕРГА. Новый Кёнигсберг №7 Published on Oct 2, 2012 Калининградский бизнес-журнал
Перепуганного японца советские солдаты выудили из подвала и отправили домой (URL: https://old.rudnikov.com/article.php?IBLOCK_ID=1&SECTION_ID=0&ELEMENT_ID=18858 最終閲覧日：2021年7月30日)。
- ²² 織田「ケーニヒスベルグ籠城記」246頁。
- ²³ 『朝日新聞』1945年5月1日朝刊。
- ²⁴ 織田寅之助「特別寄稿／ナチ独逸崩壊の頃を想う（続稿）」『大衆読売』新年号、1947年、23頁。
- ²⁵ 「欧州戦終了後、対日参戦に転ずる確信を持った／ソ連参戦分析、生かされず／1945年6月、外相に報告」『産経新聞』2017年1月12日（ウェブ版）。
- ²⁶ 織田「特別寄稿／ナチ独逸崩壊の頃を想う（続稿）」24頁。
- ²⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02032393400、2. 在ドイツ邦人引揚に関する件（在ベルリン総領事報告）（A-7-0-0-8_6_002）（外務省外交史料館）21、24画像。
- ²⁸ これらの部分については織田の孫、伏木宏奈氏の母が織田寅之助から聞いた話に基づく。
- ²⁹ なお、高島については、ウクライナ保安庁（SBU）アーカイブ（旧 KGB アーカイブ）にも史料を照会したが記録は残っていなかった。
- ³⁰ スターリン時代の一般の日本人犠牲者の一例は大島幹雄『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』祥伝社、2013年を参照。